

## 第118回 記者懇談会実施概要

- 1 日時 2017年9月20日(水) 15:00~16:45  
2 場所 関西大学梅田キャンパス 4階 KANDAI Me RISEラボ(多目的室)  
3 内容

(1) 第37回「地方の時代」映像祭2017 概要記者発表(15:00~15:15)  
・市村 元 「地方の時代」映像祭プロデューサーより概要説明および入選作品紹介

(2) 研究発表・質疑応答(15:15~15:45)  
・林 武文 総合情報学部教授  
発表テーマ「ミュオグラフィを主題とするサイエンスアートコンテンツの開発」

(3) 学内状況説明(15:45~16:30)

- ① 関西大学アジア・オープン・リサーチセンター(KU-ORCAS)の設立  
およびキックオフセミナーの開催について 資料1
- ② 法政大学・明治大学との連携協定締結について 資料2
- ③ 社会学部創設50周年記念  
テレビ5局トップによるパネルディスカッションの開催について 資料3
- ④ 商学部主催 関西大学ビジネスプラン・コンペティション  
KUBIC2017本選会の開催について 資料4
- ⑤ 吹田市と大学院ガバナンス研究科との推薦入学試験に関する覚書の締結について 資料5
- ⑥ 関大防災 Day2017の開催について 資料6
- ⑦ 社会安全学部大阪連続セミナーの開催について 資料7
- ⑧ 関西大学おおさか文化セミナー(後期)の開催について 資料8
- ⑨ ピア・コミュニティ10周年記念事業  
「ピア・サポート活動報告・交流会」の開催について 資料9
- ⑩ 1年次生および3年次生父母・保護者対象 就職説明懇談会の開催について 資料10
- ⑪ 関西大学研究・技術シーズ集2017-18の発行について 資料11

(4) 意見交換・質疑応答(16:30~16:45)

※学長はじめ執行部に対し、テーマを問わず自由にご意見・ご質問ください。

### 4 大学側出席者

芝井敬司学長、良永康平副学長、高作正博学長補佐、  
市村元「地方の時代」映像祭プロデューサー、林武文総合情報学部教授、  
内田慶市外国語学部教授(KU-ORCAS研究代表者)、藤田高夫文学部教授(同メンバー)、  
立仙和彦総合企画室次長、富山浩嗣学長室次長、植田光雄学長課長、依藤康正広報課長 他

### 5 参考資料

- (1) 関西大学ニューズレター「Reed」第50号  
(2) 東西学術研究所 第57回泊園記念講座 開催チラシ  
(3) 関大生の活躍  
(4) 行事予定表(9月~10月)

以上

### 【次回(第119回)記者懇談会開催予定】

日時: 2017年11月15日(水) 15:00~17:00

場所: 梅田キャンパス

備考: 当日に説明・情報提供を希望する事項がございましたら事前にお知らせください。

TEL: 06-6368-1131 E-Mail: kouhou@ml.kandai.jp

## ミュオグラフィを主題とするサイエンスアートコンテンツの開発

総合情報学部教授

林 武文

報告者の林は、地域社会に地域プロモーションのメリットをもたらす「文化資本コンテンツ」の開発を進めており、これまでに、3次元CGを用いた大阪の歴史景観の復元、超高精細画像技術を用いた地域の古美術作品のコンテンツ開発、ドローンによる空撮と360度映像を用いたメディアアートコンテンツの開発と情報発信に関与してきた。今回は、その新たな展開として、ミュオグラフィを主題とする情報コンテンツの開発について紹介する。

ミュオグラフィは、地上に降り注ぐ宇宙線の中のミュオン粒子（ミュオン）を用いて地殻や大型の構造物を透視する技術である。近年、火山のマグマ、エジプトのピラミッド、原子炉、ビルや橋脚などの内部の調査に用いられ、土木・建築、防災、考古学など様々な分野での実用化が期待されている。そこで、ミュオグラフィとその背景にある最先端の科学技術に対する理解を深め、新たな可能性を探る「ミュオグラフィアートプロジェクト」を2017年4月に設立した。このプロジェクトはサイエンスアートの要素を加えたコンテンツ開発と情報発信を行うことを特徴としており、学外の芸術家や美術館関係者も参加している。

2017年9月5日～11日にグランフロント大阪 ナレッジキャピタルにて展示と講演により市民に向けた情報発信を行った。ここでは、3D-CGを用いた可視化に基づくAR（拡張現実感）コンテンツ、計測結果の音響化に基づくサウンドインスタレーション、超高精細画像を用いたアート作品の提示、3次元錯視を用いたサイネージなどを芸術家による絵画作品と共に展示して様々な層の来場者からの評価を得た。本プロジェクトでは、このような情報発信を国内外で継続し、情報表現と効果的な発信の方法を模索する予定である。

近年深刻化している若年層の科学離れを食い止めるための一手段として、サイエンスアートを利用する教育が欧米の先進諸国では注目されつつある。本研究の取り組みが、最先端の科学や技術に対する興味を喚起し、理解を促す新しい教育手法として社会に貢献できることを期待している。

### プロフィール

1985年3月 名古屋大学大学院工学研究科機械工学専攻 修士課程修了

1985-1994 NTT 研究所 記憶装置とロボットセンサの研究に従事

1988-1994 ATR 視聴覚機構研究所（出向） CGと空間認知メカニズムの研究に従事

1992 博士（工学）

1994- 現在 関西大学総合情報学部

現在は、情報の可視化とヒューマンインタフェースに関する研究に従事。視覚を中心とした人間の情報処理メカニズムを解明し、ヒューマンインタフェースにおける情報提示方法を明らかにすることを目的に、奥行き知覚の研究、可視化システムの研究、地域振興に向けた文化資本コンテンツの研究などを行っている。